

教職38年目、「理科」教師としての歩み

奈良橋 隆 己

新潟県村上市立神林中学校

1 寄稿に当たって

2年前の平成30年3月31日をもって定年退職を迎えました。その後、2年間の再任用期間を経て、現在は居住地に隣接する村上市立神林中学校に常勤講師として勤務させていただいています。昭和57年3月北里大学衛生学部化学科を卒業後、生まれ故郷の新潟県に戻り、昭和、平成、令和と年号が変わる中、教員生活38年目を迎えることができたのは、数多くの生徒たちとの出会い、関わってくださった多くの方々の支えがあったのことに改めて感じています。

母校北里大学教職課程センターの山本先生からの投稿依頼、驚きと共に私のような者が執筆してもよいものかという一抹の不安もありましたが、この際これまでの自分の歩みを振り返る機会にさせていただければと思い引き受けさせていただきました。

2 プロフィールから

私は、新潟県の北部神林村（その後市町村合併で村上市に変更）の荒川河口にある塩谷というところに生まれました。家から3分も歩けば波打ち際、夏休みは毎日海水浴で時を過ごし、帰りがけには草わらで鳴くキリギリスを捕まえ家で飼い、近くの製材所のおがクズ山でカブトムシの幼虫を掘り出し育てるのも楽しみでした。釣りにもよく友達と行きました。秋には近くの松林でキノコ採り、冬は空き缶に雪を詰め込み塩で冷やして自作アイス作りと自然が遊び場でした。地元の小中学校を卒業後、高校受験に失敗し、列車で片道2時間離れた県のほぼ中央にある私立高校に通いました。今でこそ駅までの送迎は自家用車を使うのが当たり前ですが、私が高校生の頃はそんな家庭は皆無で、夏場は自転車で通い、冬場は高校の近くに下宿生活しました。実家は現在も兄たちが味噌と醤油の醸造業を営んでいます。週末家業を手伝うのは当然で、大学入学後も帰省のたび家業の手伝いをごく自然にしていました。味噌や醤油は発酵食品です。食卓での話題も味噌造りに関したことが多く、周囲の環境がいつの間にか「科学好き」の自分をつくっていったのではないかと思います。

科学の中でも特に生物に興味があったので、動物に関係した学部の受験を考え、理学部の生物学科や水産学部への進学を考えるようになりました。最終的には、北里大学水産学部身に身をおかせていただくことができました。当時教養学部の1年間を相模原校舎で過ごし、2年生からは水産学部のある岩手県の三陸キャンパスで過ごし、将来は魚の増殖等の仕事に就けないかという思いで生活していました。リアス式海岸の岬の突端にある三陸キャンパスは、早朝は湾に霞がかかり私が育った日本海とは全く異なる変化に富んだ風景に心あられる毎日でした。その後、心境の変化から2年生の途中で転部試験を受け衛生学部化学科2年へ編入しました。三陸キャンパスでは1年間という短いキャンパスライフでしたが、当時水産学部が力を入れていたロブスターの大きさに目を見張り、実習では魚のホルマリン標本づくりや、魚のスケッチを一日かけて可能な限り描くという実習、ウサギを使った解剖実習は特に印象に残っています。ここで学んだ標本づくりやスケッチ実習は、教員になってからも大いに役立ちました。

衛生学部へ転部後はあっという間の3年間でした。無機化学よりも有機化学や生物科学、特にバクテリアやウイルスへの関心が強くなり、4年次には有機化学教室に籍を置きながら、北里研究所の鈴木先生のお部屋で先生のお手伝いさせていただき、インフルエンザウイルスをテーマに卒業研究をさせていただきました。週に1度サイエンスの原書を使っての学習会とその後先生を囲んでの飲み会が実に楽しく、充実した毎日を送らせていただきました。そんな中、5月下旬には教員免許を取得するために、母校の高校で2週間教育自習をさせていただきました。高校時代お世話になった下宿先で2週間の短期下宿をさせていただきました。指導教官は私が高校のとき教えていただいた化学の先生でした。転部後の私は、卒業後の進路についてはっきりした目標はありませんでした。ただ、当時生活費を切り詰めるため、一緒に暮らしていた埼玉県で小学校の教員をしていた姉の日々の仕事に向かう姿勢や熱意が自然に自分の心を動かしていたようで、誰から進められたわけでもなく教職課程の授業を受講していました。しかし、「自分には教員しかない」といった強い決意もなく、たいした準備もしないまま地元新潟県と埼玉県の教員採用試験、東京都、神奈川県、山形県の私立高校の採用試験を受験しました。神奈川県の私立高校以外には不合格でした。せっかく合格した高校でしたが、諸事情で辞退しました。そうこうしている間にも、周囲はどんどん内定が決まり焦りが募る中、ご指導いただいた研究所の鈴木先生の紹介で江東区にある臨床検査会社に内定が決まったのは2月になってからでした。

3 10分が今の私の原点

鈴木先生の点検も終わり締め切り日ぎりぎり、有機化学教室の扉がしまる5分前ようやく卒論を提出することができました。返す返すクロスプレーの日々を送る私でした。

昭和57年4月1日13時から、上野の不忍池に近いホテルで入社式が行われました。当日は天気がよかったと記憶しています。いよいよ社会人としての第一歩を踏み出す時がきま

した。入社式が終われば、新入社員全員で2週間の研修が待っています。緊張の中、2階ホールで入社式が始まりました。式が始まって15分位立ってからだと記憶しています。ホテルのフロントから、私に緊急の電話が入っているとの連絡でした。担当の方に断りを入れフロントに向かうと新潟の父親からの電話でした。話の内容は、「県義務教育課下越教育事務所から中学校理科教員の欠員補充として講師依頼の電話があったがどうする」といった内容でした。話の内容にビックリ! 「今入社式の真っ最中だよ」「断ってくれ」というのが筋道だと思いますが、心のどこかに教員への未練が残っていたのだと思います。父には「10分待ってくれないか」と話し受話器を置き、入社式会場に戻りました。会場では式が続いていましたが、真に心ここにあらずの心境でした。そして、再びフロントからの呼び出し。結論は「教育事務所に了解しましたと伝えてくれ」でした。この10分がその後の38年間の教員生活の出発点でした。当然学校は新年度が始まっていて急いでいます。明日には教育事務所に行かなければなりません。「さて、どう会社の方に切り出せばよいか」「まさか、入社式の日で辞職願いは出せません」。結局は、「実家から、母が急病で戻ってくるよ」という電話が入ったので帰郷させてください」と嘘をついてしまいました。翌日には教育事務所で手続きを済ませ、赴任校にご挨拶に伺い校長先生に事情をお話しし、再び東京に戻り会社には父とお詫びに行ってきました。こんなこともあってか、志はただ一つ。教員試験に合格することがお世話になった方々へのお恩返しと思い、昼は学校での勤め、夜は採用試験の受験勉強と必死になって取り組みました。

4 K中学校での経験

決意を新たに、K中学校での教員生活が始まりました。担当教科は3年生1クラスと1年生2クラスの理科と2年生の数学を免外で持ちました。K中学校のあるS町は古くからの漁師町でしたが、十年ほど前から県の港湾開発計画の地となり急激に開発が進みました。町民は財政的に豊かになった反面、多くの家庭で子どもとのかかわりが薄れ、私が赴任した頃は真に荒れの真っ只中でした。平気で遅刻する生徒、授業中の徘徊、対生徒暴力、対教師暴力、喫煙、教室の放火未遂事件もありました。校外ではバイクの窃盗事件やシンナーの常習者もいましたが、学校生活を振り回すのは一部の限られた生徒で、大半の生徒は、明るく素直な子どもたちでした。(学校が荒れると、この一部の生徒にエネルギーのほとんどを費やすものですが・・・) 大学を卒業したばかりの私にとっては、本当にハードな毎日でした。しかし、その後の中学校教員のあるべき姿の一つを教えてもらいました。

学校にはいろいろな生徒がいます。すぐになじむ生徒もいれば、なかなか心を開かない生徒もいました。そんな悩みを当時50代の女性の先輩に相談しました。「奈良橋さん。何か趣味はあるの」と言われたので「中学の頃からフォークギターをやっています」と伝えると、「文化祭で弾いてごらんさい」「普段見ない先生を見て、接し方が変わる子もいるはずよ」と言われました。当日は、生徒会の出し物に飛び入り参加し松山千春さんの「季

節の中で」を演奏しました。生徒だけでなく保護者、来校された住民の方々の前での演奏はとても緊張しました。しかし、翌日から生徒たちとの垣根が少し低くなったように思え、出し惜しみしないことも生徒との関わりでは大切だと知ることができ、これ以降も赴任した学校の文化祭や三送会などでしばしば弾かせてもらっています。

部活は野球部の副顧問でした。元々運動は好きでしたが、経験は全くありませんでした。特に困ったのが守備練習でのノックです。ボールにバットが当たらない。当たったと思ったら全く方向違いに打ってしまい、生徒には申し訳なく感じていました。そこで、放課後はバックネットに向かっての自主練を繰り返しました。下手なりの姿に、生徒たちもついてきてくれました。特に1、2年生は本当に野球が好きで明るく素直な子どもたちでした。3年生が引退し新チームで秋の大会に向け練習を再開した夏休み直前、顧問の先生がアキレス腱断裂の怪我をされ新チームを任されました。私が取り組んだのが、練習グラウンドの除草と整備です。決して十分に整った野球場でなかったこともあり、スコップ、一輪車、トンボを持ち出し全員で汗だくになりながら整備しました。この一体感がチームの結束力につながったのか、秋の新人戦の決勝では4番のサヨナラホームランが飛び出し劇的な幕切れで優勝しました。子どもたちと抱き合い喜び合った時のことが忘れられません。年も明けて3月初めには無事採用の知らせがあり、ホッとした反面、野球部の生徒たちとの別れは辛かったです。特に卒業式前に発行された学校便りには、2年生のキャプテンが私との出会いとこの1年間の関わりを書いてくれ、逃げ出さずに頑張ってきて本当によかったと思いました。離任式後にグラウンドに向かうと生徒たちが整列し、私との思い出を話してくれました。途中から目を開けていられず、人前もはばかり泣き崩れていました。部活動の魅力と生徒目線という指導の基本を教えてもらった学校でした。

5 今につながる先輩、科学研究との出会い

昭和58年4月、念願の中学校理科教諭を栃尾市（現長岡市）のS中学校（その後統廃合で無くなりました）で迎えました。全校生徒120名ほどの学校でした。私にとって幸運だったのは、2人の力量ある先輩理科教師に出会えたことでした。1人は赴任校の笹岡茂教頭先生、もう1人が市理科教育センター専任所員の種村清作先生でした。教頭先生は学生の頃から植物研究に熱心な方で、市教育委員会からの依頼で種村先生と共同で「栃尾の植物」という図鑑を執筆中でした。教頭先生からは、管理職になって初めての新任理科教師ということで目をかけていただき、図鑑作成のお手伝いもさせていただきました。教頭先生は、今では数少ない俗に言う学者教師でした。ともかく植物については何でも知っている方でした。生徒がグラウンドで見つけた芽生えたばかりの雑草をいとも簡単に同定され、その植生を説明される先生の凄さ、先生を尊敬のまなざしで見つめる生徒の表情をはっきり覚えていてます。先生のお宅にお邪魔した際、3万点を超える標本と、調査中の県内に生育するスゲ科植物の調査資料に圧倒され、いつしか憧れに変わっていました。

赴任校では女子バレーボール部を任されました。これも未経験でしたが、前任校での経験を活かし練習の毎日でした。また、バレー部の指導と並行して4月から6月末までは特設陸上部の指導、12月から2月末までは、学校近くの専用スキー場に移動しアルペンスキー部の指導で、帰校は夜の9時頃だったと思います。翌日の資料づくりや予備実験と準備で、学校を出るのは10時を過ぎるのが当たり前の毎日でした。勿論若かったからこなせたとは思いますが、理科教師に成れたという充実感と先生のご指導のもと、事前準備や予備実験の大切さを肌で感じていたからこそやり通せたと思います。

市理科教育センターの種村先生にもお世話になりました。学級担任を希望しましたが、2年目も校内事情で叶えられませんでした。面談の際、当時の外川校長先生から、「先生の希望は叶えられないが、この機会に理科の指導法など研修に力を入れないか」とお話をいただきました。校長先生の後ろ盾もあり、今では考えられませんが1年間で三十数回の理科に関わる研修に参加させていただきました。その研修の中心が市理科教育センターでした。

新潟県には県立教育センターを中核とした小中学校教員の理科指導に特化した研修施設、地区理科教育センターがあります。当時は23地区（現在は13地区に統廃合）に理科センターがあり、各市町村が独自に管理運営しています。各センターには、設置する市町村の小中学校に籍を置く専任所員が1人ずつ配置されています。栃尾市理科教育センターの専任所員が種村先生でした。種村先生の専門はコケ植物で、上越教育大学大学院に内地留学されるほどの方でした。大変物腰の優しい方で、研修時は勿論、部活後の遅い時間でも相談にのっていただきました。教材の製作、教材を使った指導法、野外観察を通して苦手な植物の見分け方や覚え方、地元の地質や地場産業など、多くの事を学びました。

S中学校の夏休みの課題は、乾燥ヨモギの葉を1人4kg採取してくるというものでした。このヨモギはお灸の材料になり、業者に買い取ってもらい生徒会の活動資金に役立っていました。また、理科では最低百種類の植物標本をつくるか科学研究のどちらかを全員が提出することになっていました。植物担当は勿論教頭先生。私は科学研究の担当になりました。夏休みまであと1週間位だったと思います。野球部の2年生数名が植物化石を持ってやってきました。話を聞くと自宅付近のトンネル工事跡で見つけたとのことでした。そこで、週末部活が終わったら化石採集に行こうということになりました。現場は川に沿った高さ3m幅10m、奥行き30mほどの場所でした。化石採集も一段落し天井を見上げると何か黒い影が頻繁に飛び回っていました。目を凝らすとコウモリです。それも普段見かけるアブラコウモリより遙かに大きなコウモリでした。学校に帰り教頭先生にお話ししたところ「もしかしたらこのコウモリかな」と、ある研究誌を見せてくださいました。その冊子は20年ほど前のもので、「栃尾市でのキクガシラコウモリの発見」という題名でした。教頭先生のお話しでは、研究誌の発表以来、栃尾市では見つかっていないとのことでした。私は「これだ!」と思いました。キクガシラコウモリの再発見と生息域を生徒と調べて科

学研究で発表しようと考え、2年間継続で研究しました。手始めは、コウモリの同定です。前述のトンネルは間口が広すぎて捕獲困難でした。そこでコウモリが棲みそうな横穴を探ることから始まり、捕獲方法も生徒といろいろ考え試しました。最終的には防鳥網を使い捕獲に成功しました。捕まえたときの感触を今でもはっきり覚えています。ホルマリンを使った標本づくり（作り方は大学時代の実習の知識と経験を活かすことができました）、理科センターへの同定依頼を経てミカドキクガシラコウモリと判明しました。実に20年ぶりの発見でした。その後、地域の方から目撃情報ももらっては、生徒と週末市内の横穴（イモ穴と呼ばれ、野菜類の保存に使っていた）を片っ端から探し、捕まえては体長や体重を測定し、マーキングして放つ作業を繰り返しました。中には高さが30cm位しかなく底を湧き水が流れる古い用水も調べました。危険を感じ私が潜り込みましたが、あのとき地震でもあったら・・・自分でもよくやったと思っています。また、相手は夜行性です。管理職に相談の上、生徒のお宅の了解を得て生息域近くにテントを張り、巣穴を行き来するコウモリの時間や飛ぶ方角を徹夜で観察しました。今から思うと、各ご家庭と管理職の理解と協力あっての研究でした。今の時代では、難しいとは思いますが・・・

新潟県には、夏休みを中心に小・中学生が行った科学研究の発表会（いきいきわくわく科学賞－新潟県児童生徒科学研究発表会－）があります。今年で55回目を迎えました。コウモリの研究は、栃尾市での発表会を経て新潟県教育長賞を受賞させていただきました。受賞の知らせが届いたときの生徒の喜びと誇らしげな表情、先生方からの祝福のことが支えであり、研究のたびに指導する私自身が感じる「わくわく感」が忘れられず、その後三十数年間科学研究に携わらせていただいています。

6 科学研究の魅力

科学研究との出会いは、私の中学校理科教師としての生き方に大きく影響しましたが、その後4年間のブランクがありました。2校目は各学年5クラス、全校生徒が500人を超える長岡市のKI中学校に赴任しました。学級経営に道徳指導、教科指導に部活動と忙しくなり、科学研究からはつつい遠ざかりがちになりました。しかし、ここでは理科サークルに所属し、市内の小中学校の理科の先生方と親交を深めました。部活後の平日夜に定期的に集まり、各単元の指導法や教材の開発、小・中学校9カ年に渡る指導計画づくりも経験しました。また、2年目からは長岡市理科教育センターの兼任所員（年2回の中学校理科教師対象「単元別講座」の講師、科学研究発表会の運営のお手伝いなど）も経験し、長岡市教育委員会主催の教育論文に投稿し賞もいただきました。

科学研究との再開は、地元村上市のKA中学校に赴任してからでした。その後、数年のブランクもありましたが、可能な限り生徒と共に科学研究に挑戦してきました。

思い出す限り、これまで科学研究発表会に参加した主な研究と内容を羅列してみます。
・「なぜ新聞紙を使って窓ガラスを拭くときれいになるのか」

この研究は、「新聞に窓ガラスを新聞紙で拭くときれいになると書いてあったけどどうしてなんだろね。」という校長先生との会話がヒントでした。部活動を引退した生徒に持ちかけスタートしました。困ったのは汚れ具合をどのように数値化するかでした。大学時代の物理実験を思い出し、生徒と話し合い光の透過度を測る装置をつくりました。新聞専用インクと紙は、新聞社の印刷工場に行きもらってきました。

・「エジソン電球への挑戦」

この研究は、4校目で初めて科学部の顧問として携わりました。クリア電球を丁寧に切断し、電球内部にどんな気体を入れるかから始まり、エジソンに真似て竹や稲わら、スキの茎などを炭化させたフィラメントをつくり耐久実験もやりました。当時の部長は、その後大学の理学部に進んでくれました。

・「植物の葉にある気孔分布の研究」

この研究は、6校目の学校で5年目に行った研究です。野球部を引退した理科好きの生徒3名に声をかけて始めました。植物は気孔を通して気体が入り出し蒸散や光合成、呼吸していることを1年生で学習します。気孔数は一般に葉の裏が多く表は少ないことを話すと、気孔をテーマに研究したいということになりました。オオバコとツククサに絞り込み20枚ずつ葉の裏と表のプレパラートをつくり、葉の先端、中間、末端ごとの気孔数を顕微鏡下で数え、気孔の分布密度を求め、生育環境との関係を調べました。猛暑の中、換気がよくない理科室にこもりひたすら顕微鏡で気孔の数を数える生徒の粘り強い観察があったからこそこの研究でした。

・「雑草水素の研究 part I, part II」

この研究は、7校目の学校に赴任した2、3年目に行った継続研究です。当時コンピュータ部の顧問であったことから、1年目は3年生の部員2名と研究しました。その結果を受けて、翌年同じコンピュータ部の2年生2名と研究に取り組みました。この研究は、何か面白い研究ネタはないかと探っている中、東京電力のホームページで見つけた実験をヒントに私から提案しました。燃料電池の材料は水素と酸素です。石油から取り出した水素と空気中の酸素を使い電気をつくるのが一般的で、将来は水の電気分解から水素を取り出すことで脱炭素社会の切り札ともいわれています。この燃料電池に欠かせない水素を身のまわりにある草から取り出すのが雑草水素です。身のまわりにある雑草表面に生息する嫌気性細菌のはたらきで水素を発生させるというものです。細菌の培養方法も、大学時代の経験が生きました。研究の検証から実験を行い、枯れ葉でも十分水素を発生させることを見つけ、少しでも長くモーターを動かすための研究まで深めました。そして益々過疎化が進む地域に対して、稲わらで水素をつくり、その水素で電気をつくるという地域復興のための再生可能エネルギーの提言をしました。

・「実用化カイロに向けての研究 part I, part II」

この研究は8校目、私が教頭として最初に赴任したKU中学校でバスケットボール部と

野球部の2年生2人が共同で2年間にわたって行った研究です。2年生の理科では「物質と原子・分子」の単元で発熱・吸熱反応の学習がありますが、ここで発熱反応の一つとして化学カイロの実験を行います。実験では温度は50度を超えますが、発熱時間は限られてしまうことから、市販の化学カイロに匹敵するカイロを作りたいという思いで研究を進めました。「化学カイロ」をテーマにした研究は、しばしば見掛ける研究でしたので正直あまり気乗りはしませんでした。そこで、生徒へは市販のカイロに含まれる成分をもとに、条件を変えながらデータを積み上げましょと助言しました。夏休み明けノートにまとめたデータの凄さに圧倒され、何とか世に出したいという思いで、補足実験をいっしょに取り組みました。正直なところ日常の教頭としての業務は多忙を極めるものでしたが、2人の熱意で完成までこぎ着けました。

その後も教頭と理科教師という2足のわらじを6年間履きながら、公務のすき間をぬって「植物の蒸散についての研究」「夏を乗り切る教室環境の工夫」「植物の発芽と成長についての研究」「使用後の化学カイロの研究」「結晶の作成～砂糖の巨大化への道～」と毎年発表会に参加し、幸いにも地区代表として県大会に出品させていただきました。紹介した研究は、優秀賞、わくわく賞、東北電力賞、新潟日報社賞、県教育長賞と上位の賞を受賞することができました。そして、退職後再任用のI中学校での1年目の研究「北浜海岸の環境変化と海砂のはたらき」、2年目の研究「波のはたらき」で念願の県知事賞を2年連続でいただくことができました。

これまで物理、化学、生物、地学のいろいろな事象の科学研究を生徒と共にやってきました。どのテーマも、大学時代の専門的な実験や観察が経験値となり多様な見方で事象を捉える姿勢や納得するまで突き詰めるという研究スタイルにつながったと思います。

7 理科に没頭した4年間

平成4年4月から新潟県立教育センターで1年間理科長期研修員として研修を受ける機会を得ました(現在はこの制度はありません)。研究室は初等理科、生物、物理、化学、地学の5研究室があり、同期生8名と共に各研究室の講座を授業形式で3ヶ月間受講しました。また、並行して8ヶ月に渡る長期の研修も設定されていました。私は苦手な地学を選び、室長の河内先生のご指導のもと村上市の丘陵地帯の野外調査を行い、この地域の層序(地層の形成された順序)をまとめました。この結果は、その後村上市を通る日本海東北自動車道建設の際、測量会社の方に提供し工事に役立ててもらいました。県センでの研修終了後は、地元村上地区理科教育センター第10代専任所員として3年間勤務させていただきました。1年目にはセンター設立30周年行事があり、協力依頼のため管内の50を超える全小中学校を訪問しました。時間はかかりましたが、この経験が人とのつながりと地域を知る機会になり、理センの運営そして教頭になってからも学校運営に役立ちました。2年目には、村上市の教育情報センターが完成し、理科センターも移転しました。移転と共に

運営規程が見直され、教員対象の研修に加え地域住民対象の事業も加わり、市民向け星空教室や科学の祭典を開催しました。さらに情報センターに併設されたプラネタリウムの運営も任されました。全国プラネタリウム協議会に参加し、プラネタリウム番組の作り方を学び、学習投影にも力を注ぎました。自作スライドやパノラマづくりに没頭し、週末には一般市民向けにチケット販売や星空解説も行いました。忘れられないのが、明日は小学生が学習投影で来館するという前日です。プログラム通りに投影機が動かず警備員さんの呼びかけに、気がつけば夜中の3時を回っていたことがありました。

3年目には全県の理科教育センターで分担して執筆した小中学校向けの「私たちの飼育と栽培」という冊子も完成しました。私は昆虫館や展示会場、園芸店などに出向き、ゲンゴロウとカエル、キクについて飼育や栽培方法を学び、実際に育てながら原稿作りを行いました。

8 危機管理意識が学校の安心安全に生きる

これまで、理科教師としての歩みを思うがまま綴らせていただきました。しかし、37年も教師という職業に就いていれば平穏な時期や楽しい事ばかりとは言えません。

学校は生徒や家族、地域住民にとって安心で安全な場所ではなくてはいけません。登校する生徒、送り出す保護者、見守る地域住民、誰もが学校は任せて安心、安全な場所だと信じているからこそ、最愛の我が子、地域の宝である子ども達を学校に送り出してくれます。

採用から7年目となる赴任地は、地元のK中学校でした。4月末入学間もない1年生の男子生徒を落雷の直撃で亡くすという痛ましい事故を体験しました。1年生は仮入部期間で、放課後1時間の体験入部を終えると帰宅することになっていました。事故があった日は、1年生が下校する直前から急に雲行きが悪化し激しい雨と雷に見舞われました。停電で校内放送ができない状況の中、私は振り鐘で生徒に合図をし、残っていた全職員が手分けして校内を巡視し、残っている生徒全員を体育館に集め待機させ、天気が回復したところで職員同伴で帰宅させました。生徒を自宅に届けて1時間くらいしてから、事故に遭った生徒の家からまだ帰っていないとの電話がありました。直ちに生徒の家に向かう通学路を中心に捜査したところ、学校の校門から数百m離れた農道と側溝で2人の生徒が発見されました。2人が参加した部活は予定より早めに切り上げていたため、巡視前に校舎を出ていたのです。1人は雷の直撃を受け即死、一緒にいた友人は落雷の衝撃で飛ばされ側溝で気絶しているところを発見されました。翌日、弔問に訪れたときの亡くなられた生徒のご家族の気落ちした姿は今でも忘れられません。当時は、今のように詳細な天気予報はなく、携帯機器での発雷予報や防災無線などもなかったことから、天候の急激な変化を予測し対応することは難しかったと思います。しかし、この痛ましい事故を二度と起こしてはいけないと落雷や竜巻、地震、津波等の自然災害や火事、不審者への対応等危機意識の向上やマニュアルの見直しを常に心がけるようになってきました。

痛ましい事故から9年後、再び学校にとって決してあってはいけない「いじめ」による自殺と向き合わなければなりません。AH中3年目、2学年の学年主任でした。AH中は複数の中学校が統合した学校で、開校時からいろいろな話題が耳に入っていました。私が赴任したのは開校10年目でした。これまでの先生方の努力にも関わらず、校内では一部の生徒による喫煙、授業中の徘徊、器物破損、校外では窃盗、万引きなどが続いています。悩み相談のアンケートは、月に1度のペースで行っていましたが、亡くなった生徒本人からのSOSはなく、他の生徒からの情報で知ることができました。当時担任は新採用で初めての学級経営ということで、生徒指導部と連携を図り情報共有しながら、学年部が中心となり対応しました。その結果、1年時、友人への物の貸し借りがこじれたのが引き金となり、亡くなった生徒に対し複数の生徒が継続して嫌がらせをしていることがわかりました。「校内いじめ対策委員会」での協議のもと、管理職、生徒指導主事、学年部職員での情報共有を第一に指導に当たりました。生徒のご家庭には途中経過を含め逐一報告し不安解消に努めました。発見から約2ヶ月後どうにか解決に向かい、特に気になる情報も入らなくなり生徒の表情も明らかに改善に向かいました。不審な点があれば即対応するというで継続して見守ることになりました。しかし夏休み直後、郡市内の生徒会交換会に生徒会の一員として参加するため登校し、職員室に顔を出しあいさつしたのが彼の元気な顔を見た最後でした。それから1週間後自ら命を絶ったのです。その日私は、家族と県外に旅行に出かけていました。当時は携帯電話など無い頃です。外出先からもどりフロントで受話器越しに学校からの連絡を受けたときのことは決して忘れられません。急遽帰宅し、学校に到着したのは夜の12時を過ぎていました。正直この先どう行動すればよいか混乱の中、校長先生の指示により生徒指導主事を中心に今後の取り組みについて話し合いました。夏休み中であったことから、他の生徒の動揺を考え全校生徒の家庭訪問を行いました。亡くなられた生徒のご家庭には管理職、生徒指導主事、担任と共に訪問させていただきました。ご両親の行き場のない怒り、学校への不信感がありありと感じられ、その場に居ることが辛くてたまりませんでした。学校生活の背景に自殺の原因があるのではという質問に、調査期間と報告の約束をさせていただきました。臨時PTA集会での答弁、調査後のご家族への報告、地域での報告、第三者委員会での応答・・・言い尽くせない辛い体験でした。事件は裁判になり、2年後私も証人として地方裁判所で答弁しました。「いじめによる自殺」という報道を目にするたびに、あのときのことが鮮明に思い出されます。そして痛感するのです。「死んでしまったら何にも残らない」と・・・。

学校は生徒が安心して生活する場所で無くてはいけません。安心と安全のポイントは、生徒と寄り添い、アンテナを張り巡らし情報を把握し、知り得た情報は、報告・連絡・相談・確認により組織的に対応していくことです。そして家庭と情報を共有することが大切だと思います。管理職となった後も、一番心がけていたことです。

9 北里大学教職課程で学ぶみなさんへ

現在、4月に開校した新設校で3年生の学級担任（2人担任制）と進路指導主事の仕事をしています。先月の10月5日、創立第1回校内合唱コンクールが行われました。生徒が選んだ課題曲は森山直太朗さんの「虹」。伴奏者、指揮者、パートリーダー選出と進み、4部合唱にソロパートもある曲です。実行委員中心に放課後練習、歌詞の情景をつかむ時間も作りみんなで共有し合いました。もともと合唱の好きな学級ですが、生徒は一生懸命練習に取り組みました。発表会前日、ステージでの本番前最後の練習、観客は私ともう1人の担任です。生徒の歌声に身震いし涙が止まりませんでした。コンクールは残念ながら2位。終了後教室での学級代表の発表は悔し涙と「みんなありがとう。みんなと歌えたことで、見事に体育館に虹を架けました」ということばにまた涙でした。

教師という仕事は、「生徒の命を守る」「生徒が安心して生活する」という大前提のもと、学力向上をめざした教材研究は欠かせません。進路を担当すれば、計画の立案から気を抜けません。部活動も大変です。しかし、その何倍も何十倍も生徒から喜びをもらえます。この37年間、多くの生徒と過ごす中でエネルギー（「生きがい」）を何度ももらいました。

新潟県の北里大出身の教師は大変少ないです。私は中学校の教師しか経験していませんが、最高の仕事だと確信をもって言えます。是非多くの方が教職の道を志し実現してくれることを願っています。